宮本武蔵は幻想郷に転生してもなんとなんと♡

ウンチガ モリモリ太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代へと甦った宮本武蔵は刃牙との死闘後、再びあの世へ帰還することになった……が、武蔵の魂はあの世ではなくスキマ妖怪の元へと呼び寄せられていた。

目次

第一話『約束します』―― 1
第二話『降臨』―― 8
第三話『素敵な巫女』―― 14
第四話『優しいな』―― 19
第五話『取って喰う』―― 24
第六話『闇に包まれた男』―― 30
第七話『性分』―― 36
第八話『讀賣屋』―― 42
第九話『例の男』―― 50
第十話『和食派』―― 58
第十一話『一泡』―― 67
第十二話『擬態』―― 77

第一話『約束します』

「にしてもだ…面白いな幻想郷(こ)は」

四百余年も前、彼の戦国時代で天下無双の名を欲しい儘にしてきた宮本武蔵は現徳川財閥の長、徳川光成の好奇心によってクローンの肉体を生成され、その姉である降霊師徳川寒子の手により降ろされた魂を器に入れられ現代へと甦る。　当時の価値観のまま生きようとする武蔵は現代に居るべきじゃないと考えた地上最強の高校生　範馬刃牙は、武蔵を自らの手であの世へ葬ると決断。武蔵との試合が組まれる事となった。

…然して、宮本武蔵と範馬刃牙の死闘……その決着は、降霊師　徳川寒子の不意討ちにより武蔵の魂をあの世へ還すことで終結した。

…どこだ?ここは。

少年(ぼん)との試合中に老婆に抱き着かれ……その後…

「ふむ…また死んだのか俺は」
武蔵は深く考えずとも理解できた。生涯二度目の死。
しかし〝ここ〟が何処であるかを掴めずにいる。
一度目の死の際とは明らかに違う行き場。
武蔵は動揺していた。
いかん…またしても闘いとは無関係の事に動揺している。
俺の相手はいつだって人間、見失うな。

「こんにちは」

揺らりとした声で背後から話し掛けてくる
……女が一人。
振り向いた武蔵がそれに抱いた衝撃は、決してそこに居る女が珍妙な格好をしている事に対してではない。
「いつから…其処に居たのだ?」
侍の誰しもが刀を差し、命のやり取り、生き死にの闘いを行っていた彼の時代…そんな熾烈極まる時代で天下無双と呼ばれていた武蔵は

〝いつの間にか背後に人がいて
事もあろうに話し掛けられるまで気が付かなかった〟
これが如何に命取りであるか、を誰よりも理解していた。
…しかし其こは天下無双、決して動揺を表には出さない。

「ずぅ～っと居ましたよ。ほら宮本さん、貴方寝てたから。」
ふふ、ずっと…か
何処の誰とも分からぬ女に後を捕られる。
時にはそれもまた一興か……
「それで、何の用だ。俺が誰か知っているな。名乗れ。」
少しだけハッとした様な表情を一瞬浮かべ
女はにっこり…と微笑んだ。

「これはこれは御無礼を。遅ればせながら、私…
八雲紫と申します。」
名前を告げ、また一瞬微笑みを浮かべた後直ぐに続ける。
「宮本武蔵さん、貴方の事は見てましたわ。外の世界では素晴らしい活躍でしたね。で

も、彼処じゃ貴方の強大な力を受け入れる事が叶わなかった。」
「外の世界……」
「貴方にはもっと、相応しい世界が存在しています。
それはそれは清く…強く…美しい世界。
責任を持って約束しましょう、其処は貴方の居場所に成る。」
武蔵は女をジッと見詰める。瞬きもせず、際限なく剥かれた目を…有無も言わず只、ジッ…と女に向けていた。
何を考えているのか……武蔵はへの字に閉じた口をパカッと開く。
「俺に居場所を施そうと……貴様の目的は承知した。
……ただ、気に入らんのは貴様の其の態度だ。
先刻から無礼を極めておる。」
武蔵は胡座を解き、ズッ…と立ち上がる。
音もなく静寂に包まれたこの場で、武蔵を纏う空気だけがメラメラと歪み、パチパチと音を立てている…様な気さえする。
しかし、女はそれに対し
動揺することなく視線を向けていた。
あらあら…とでも云わん表情を浮かべこう言う。

「武蔵さ
バ　フ　ュッ
閃光と等しい速度では、武蔵が〝斬った〟ことを
認識するに間が置かれるのも仕方は無い。
ん……それお手付きよ。全く人間とは思えない速度の抜刀ね。でも、今は私に攻撃しても何の意味もない。少なくともそれっぱかしじゃあね。」
武蔵は気の抜けた吃驚顔で声を漏らす。
「お…おォ～～ッ……斬っても斬れぬ者、斬り切れぬ者は現世(アッチ)にも数人ほど居り驚かされたが……首を刎ねられ命斬れん者は初めてだ。」
我が刃を通さぬ肉の宮を現世にて経験した武蔵であったが、刃を通し、首を両断…身体から離れ落ち尚、ゆるゆると会話を続けている……
刀と共に戦国を生き、刀で人を斬ることだけを真面目に生きてきた武蔵にとってこれ以上の衝撃は無かった。
「貴様…物の怪か」
「ええ、そうであり、そうでない…とでも言いましょうか。…御無礼は御容赦いただきます。然し貴方への害意は塵程も持ち合わせていません。貴方に不意討ちされながらも反撃の意思を見せていない現状が何よりの証拠になりますわ。」

武蔵は顎に手をやり、首を傾げ明後日の方向を見詰める。
「ふむ…確かにな。しかし妖を相手取るのは俺も初めてだ。」
「ふふ、楽しめそうでしょ？私が案内する世界はこんなレベルじゃない。」
「れべる……」
「貴方が想像もつかない世界
然し必ず楽しめると断言するわ。」
「断れば？」
「呑んで頂けないのなら貴方をまた冥界に送ります。ゆっくりとしたいのであればそれもまた良い選択と言えるでしょう。」
首を斬っても死なぬ妖の女……この女にどんな思惑があろうかなど考える必要も無い。面白いな…人を斬りたくて斬りたくて堪らない。そんな俺がゆっくりと生きる……
笑止な。一寸先は闇、しかし面白い。
武蔵は確信していた。否、確信よりも遥かに確かで自然な思考だった。武蔵は笑みを抑えきれずに開口する。
「良かろう。話は理解した。」
そして女も笑う。

「貴方の全てを歓迎いたします。
ようこそ幻想郷へ。」

第二話『降臨』

「斬っても斬っても死なぬ者…」

「神社？」

「ええ、其処へ案内する。なんせ何も知らない世界へ行くんですもの…そこに居る巫女を訊ねると良いわ。貴方が人間である以上、それなりに物を教えてくれるはずですよ。」

「巫女だの神だの…俺が会えた立場ではないな」

稀代の人斬り魔、宮本武蔵が云うことは尤もである。

人を斬り殺し地位を登って来た彼には神など必要無い。

神が仮に居たとしても会える訳が無いのだ。

「此処には貴方の過去を気にする者などおりませんわ。〝過去〟はね。…巫女に会ったら色々と聞かれるでしょうけど、正直に答えてくれて構いません。」

「端からそのつもりだ」

武蔵が口を挟む。

「それと一つだけ、約束して頂きたい事が」
「申せ」
「危害を加えられない限りは
〝絶対〟に斬ってはいけません。」
「阿呆。俺とて誰ふり構わず斬り伏せたい訳ではない。」
「失礼、愚問でしたね。まぁアチラの規則（ルール）は巫女が順序だてて教授されることでしょう。
さて、前置きが長くなりましたが聞くよりも見ろ！です。此方に…」
妖の女は何も無い空間に穴を開ける。
穴の向こうに見えるは……
「妖術か。…にしても俺の居た処となんら変わった様子は見えんな。ここが　げんそうきょう　なのか？」
妖の女はニコッと笑う。
「ふふ、そうなのだな。差し当たり…参るとするか。」
女が開けた隙間から武蔵が踏み出す。
期待以上の期待を胸に込め、
裏切られたらタダでは置かぬ！
そんな感情…表すとしたらそういった情景だろうか。

ジャリ…と地面を踏み、武蔵は幻想郷へと降臨した。
その数瞬ほど後、何かを感じた武蔵が隙間の方へ振り返る。……隙間は閉じ、木々が彩る景色だけが目に入った。
「ふふ、奇っ怪なり妖術使い。」
武蔵は歩き始めた。
さて…神社へと案内された筈だったが……
お、ここは裏だったのか。しっかりと建っておる。
侘びらしい神社がぽつりと建っておるじゃないか。
ふふ…聞いた通りだ。早速も早速、普通ではない匂いがツンと来ておるわ。
お、居るな…鼻の先だ。三十尺程…
箒…枯葉…掃いている音が聞こえるな。
境内の掃除……巫女……か。
二十……十六……あそこを曲がれば姿を見せる筈。

「誰？」

ふふ、気配を拾いおったわ。
当然だ……姿が見えないからと言って
自らの庭で油断しているからと言って…
この距離で気付けない様では興も醒める。
武蔵が角を曲がると、そこには紅白の装束を身に纏った
少女がいた。
「参拝客？賽銭箱はアッチよ。」
少女は作った笑みで武蔵にそう言った。
どうやら彼を神社の参拝者と勘違いしているようだ。
「良い目だ。博麗の巫女。」
博麗の巫女…博麗……？俺がそう言ったのか。
今しがた自ら発した言葉の意味を理解出来ずにいた武蔵であった。しかし、目の前の
彼女がその意味も解らぬ
博麗の巫女
である事だけは何故か鉢に刻まれていた。
巫女は何かを感じた。コイツ、普通ではない…と。

同時に妖怪でも神でもない、人間であることも。
「何の用？悪いけど何か用があるなら早く言って帰ってくれない？まぁ…場合によっちゃ帰せないけど。」
「用か……ここに来ればこの世界の決まりを
教えてくれると聞いてな。」
「誰に？」
間発入れずに少女は問う。
「隙間の……はて…？忘れた。何と申したか。
思い出せんな。何故ここに来たのか。ふむ……
ここが何処か分からぬ。」

……妖の女は武蔵から自分の記憶を消していた。
武蔵が憶えているのは紅白の巫女を視界に捉えた瞬間
からであった。

「はぁ？き、記憶喪失？」
少女は少し驚いた表情で冷や汗をかく。

とりあえず…

「博麗の巫女、お前に逢いに来た！」

武蔵が目を細め笑うと同時に…

少女は目を丸くし、面倒臭そうな顔で

「あー？」

と零した。

第三話『素敵な巫女』

「なァ…知ってるか？遠い〻世界から一番強ェ奴が来たんだってよ」

「あー？では無い。俺はお主に用があって来たのだ。何しろここについて何も知らんでな…見聞を広めたい。」

「…あァ、もしかして変な紫色の服着た妖怪にでも言われた？何かあれば此処の巫女に相談すれば何でも解決してくれるって。」

巫女の少女は呆れた顔で吐き捨てるように云う。

「妖怪…そうだ、ここには物の怪がいると聞いた。

聞いた……聞いたはず。」

あァ…決まりだ。こういう何処から来たかも分からない見るからに厄介な何かを抱えた意味不明なヤツはだいたいあの〝スキマ妖怪〟が差し金なのだ。面倒臭い。しかし、かといってこの厄介人間（多分）が何をするか分からない。明らかに普通ではない空気を纏ってピリピリ肌が焦げ付く。放ってはおけない。

博麗の巫女の仕事は何もタダの神社の巫女の領分には収まらない。妖怪の退治、異変の解決、人里の警護など…この幻想郷において博麗の巫女とは絶対的に無くてはならない存在なのだ。故に、目の前にいるギョロ目の人間…博麗の本能が〝コイツは退治しなければならない〟と告げていた。

「クス…クスクスクス……」

武蔵は顎を引き震えながら笑っていた。

「ぶっ……!アッハハハハハハハハハッ!」

そして吹っ切れたかのように大声で笑い出す。

上を向き揚々と……数秒後、それは止まる。

「先刻から殺気が漏れ出とるわ、巫女よ。そう強く向けられては此方も……斬りたくもなるわ。」

鬼面毒笑……武蔵の瞳孔は大きく開き発達した犬歯がてらりと嫌に光る。その周囲がまるで陽炎のように揺ら揺らと熱気を持っているのを博麗の巫女は人一倍感じた事だろう。予感は確信へと変わり、有無を云わずに武蔵に攻撃を

ド　ッ

「〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッッ……」

武蔵は巫女の出端を完璧に押さえ、瞬速とも形容し難い速度を以て反撃した。残像が残る程の速度…彼が何をしたのかは辛うじて目で捉える事のできる彼の最後の姿勢から予測する事しか叶わない。

一つ言っておこう…武蔵の攻撃は直撃してなどいない。

端から見れば武蔵が反射神経を凌駕する度量のスピードで巫女に〝何か〟をし、巫女が顔面蒼白の中、硬直。瞬…何かされたのか？と思う事はあれど一目瞭然…巫女は一切傷を付けられてなどいなかった。

しかし、直撃してなかれど事実……

巫女は実感していた。

「斬られたッ……ッッ」

もう一度云う。実際には斬られてなどいない。しかしどうだろうか…武蔵の気魄感、圧迫感、威圧感…或はそれら全て…？其れらの前では物理的な「刀」でのダメージなど関係は無いに等しいだろう。巫女は抗い切れずにいた…圧倒的なまでの斬られたという本能的な直感に……

巫女は困惑していた…

痛ッ…くない……血…出てない…

傷…無い……無傷…多分……

一つずつ冷静に整理をし、動けることを頭では理解しつつも何故…自分は動けないでいるのか……と。

「巫女……」

武蔵がずいっと近づき呟く。

「からかってみた。お前がどれ程の者か知りたく、つい…な。お前の若さ故の未熟に乗じ俺の〝普通で無さ〟を敢えて充てつけ、俺の領域へ半ば強引に引き摺り込むようにお前を操作したに過ぎん。」

よくもまぁ抜け抜けと…

しかし巫女の耳には届いていない。

「居場所が欲しい。」

武蔵がそう言うと…まるで命じられたかのように。はたまた、呪いが解けたかのように。…巫女の硬直は和らいだ。

博麗の巫女の気紛れか、それとも人故の伝達か……

武蔵の発した一言…言葉に込められた

混じり気の無い真意を巫女は見抜く。

…気付いた時には家へ招いていた。
武蔵は出されたお茶をズズ…と啜り切ると
巫女にこう問うた。
「時にお主、名は？」
「博麗霊夢…博麗神社の素敵な巫女よ」
「ふふ、礼を言うぞ博麗うじ」

第四話『優しいな』

「すぺるかぁど…? 要らんッッッ」

茶飲みを片した霊夢が居間に戻り、
ドン! と床に座る。
「んーで? 何が聞きたいわけ?」
カリ…武蔵は人差し指で頭を掻き
何かを考えるような顔を浮かべると、特徴の総髪が
メラ…メラ…と逆毛立つ。
「立ち合う相手が欲しい。相手は選ばない。…相手が俺を選ぶ分には構わんが、俺は誰とでもよい……
頓(ひたぶる)に死合わん!」
案の定…というかまぁ、そうだろうと云うような
霊夢の答はこうだった。

「ダメに決まってるでしょ。」
の瞬間、武蔵の髪がシナ…と下る。
拍子抜け…落胆…そういった感情を受け取らせる。
「ん、ん～～～～?」
武蔵は上を向き、疑問の聲を漏らすと更に続けた。
「此処には強き者が湧くように居るのでは無いのか?
ならば其奴も思っている筈だ。立ち合う相手が欲しいと。
其れとも何だ……俺だけは駄目……俺の望みだけが
適わないと、そう申したいのか。」
「はぁーっ…」
と霊夢は呆れ果てた溜息をつく。
その表情は宛ら、稚児の我儘に対する
母親の其れにも擬似する。
「アンタねぇ…立ち合うって、斬るつもりでしょ。
つまり、殺したいって言ってるわけ。」
霊夢は核心を突く。博麗の巫女として幻想郷の均衡を保つ為には、このような後戻りの効かない刺激物を迂闊に投与出来るはずも無い。やっぱり退治しといた方が…と過

ぎるも今は未だ片隅に閉まっておく。

「何を言っている。斬らねば決着にならんではないか。」

価値観の違い。武蔵は彼の戦国時代を斬りまくることで登ってきたのだ。それは現代での復活の際も変わることは無かった。武蔵は斬ることしか知らない。しかし、それは戦国時代での話である。現代での武蔵はどうだっただろうか？試合の際、対戦相手を斬殺し観客をどよめかせた。警察に追われた際、警官や機動隊十数名を惨殺し、日本中を混乱させたのである。彼の生き方はそぐわなかった。それは現代、外の世界に限らず…また幻想郷でも同じである。

「此処で生きたい…どうしても闘いたいって云うなら

此処での決りを叩き込まないとね。」

意外か。霊夢はこの明らかに面倒臭さの塊である武蔵を

見捨てはしなかった。否、見捨てられなかったのかも知れない。もはや彼女には彼を退治する選択肢は存在していない。……無論、今の内は。

＊　＊　＊

陽が傾き、影が伸びる。

烏の鳴き声がどこか心地好い逢魔ヶ時。
霊夢は己が知り得る幻想郷についての全て――――
「まぁ…だいたいは」
…ほぼ全てを武蔵へと指南した。
意外にも意外には武蔵の方である。
長話が好きでない性分の彼が黙って話を聞いていたのは、
博麗の巫女に依る奇異な力が起因か、其れとも只の気紛れか……
武蔵は口を開いた。
「ふむ…博麗うじ、話はよォ～く承知した。
さて…では出掛けてくる。」
武蔵が重い腰を上げ部屋を出ようとする。
「ちょっ!アンタ、話聞いてた?今日はもう暗いから
明日になったら私が案内するってば。」
「何を言っている。俺は子供(わらし)か!
見聞を広めたいと申しておるのだ。
夜になれば行動を開始する物の怪も居ると言ったな…
お主から伝えられた〝やり方〟を試すとするか。」

「はぁーっ……」

コイツがただの妖怪なら直ぐに退治してノンビリお茶してるはずなんだけど…

「分かったわ。私も同行するから絶対に私の指示に従って私を巻き込むような危険な行動はしない事ね。」

クスクス…

武蔵が口元に手を向け微笑みを零す。

「何よ気持ち悪い。」

「博麗うじ…優しいなアンタ」

第五話『取って喰う』

「先程から貴様の〝報せ〟が…さぁ読み合いだ」

もう一時間近くは、歩いただろうか――――

陽は完全に暮れ、月が昇っている。

博麗神社の周辺は森である。

人里から此処へ通ずる道は獣道しかない上に妖怪の溜まり場となっているのだから、当たり前に人間の参拝客は皆無に等しいだろう。

「……なァ！博麗うじ。そうだろう？」

問いかける武蔵に対して、

数尺前を歩く霊夢は振り返ることなく返答する。

「あー？ごめん聞いてなかったわ。

もっかい言ってちょうだい。」

武蔵は馬鹿にするような態度を取り、
大声でもっかい言った。
「こんな死地に建てては参拝客など来ないだろう！
あの建造の憐れさを見るに富など感じられぬわ！」
武蔵はニヤニヤと悪戯な顔で嘲笑した。
「穢い見た目はアンタも同じでしょ。
その伸びた髪も髭も整えたら？」
言われ慣れてるのだろう。霊夢は冷静に返した。
「ふふ、この俺が言われ放題だな。
それもまた一興か……
しかし其れだけでは無い。」
「あーもう何よ」
「神社に来た時から感じてはいたが、晩になれば更に明瞭だぞ。……さっきから強い妖気を向けられとるわ。
人の〝其れ〟とは全く異なる。これが妖の気なのだろう？」
「ふーん、私は慣れてるからよく分かんないけど。
まぁ確かに人とは違うわね。でも私が居るから襲っては

来ないと思うわよ?」
「くっくく…こう強くては俺で無くとも異を察知するわ。神社に参拝客が来ない訳だ。」
「執拗い。」
「しかし、巫女が居ると人も襲えんとは物の怪とは
思えぬ貧弱振りよのォ…」
落胆すると同時に、武蔵は後ろを振り向く。
今夜は満月といえ森の夜は想像以上に暗い。
しかし武蔵は明らかに何かを見詰めていた。
「四半刻＊ほど前から尾けているな。
貴様の妖気に充てられて腰の金重も疼いておるわ。」
＊現在の約三十分
「どうした?巫女がおってはこれ以上近付けんと申すか。構わん、面を見せい！取って斬ったりせぬわ。」
霊夢は武蔵に忠告する。
絶対に殺してはいけないこと。
逆に殺されそうなら私が止めに入ること。
もし殺したならアンタを私が退治すること。

…どれも神社で耳にタコが出来る程聞かされた常套句だ。
「ふふ、要らぬ世話だ博麗うじ。俺がそうでも〝アイツ〟がそうとは限らぬ……」
「いいえ、みんな此処の決りを守って生活してるの。
それを破るような奴は幻想郷に存在しちゃならない。
居ない方がいい。そんな奴を退治するのが私の仕事。」

武蔵と霊夢の間に冷たい空気が流れる。
先程の巫女とは異質な〝気〟であった。
武蔵の目から見た彼女はまだ子供であったが、幻想郷を守護(まも)る巫女としての自覚は確たる物であると悟るには充分過ぎる……其れ程までの巫女の貌であった。

……

〝空気を讀まない〟…ということが、二人の周りを取り囲む殺人的とも云える異質な空気を打破するのに是程までに
有効だとは思うまい。

「おーい人間、あなたは取って食べれる人類？」

二人の意識は其方へと切り替わる。
霊夢からすれば聞き憶えのある声である事も、
その理由の一つと云えるだろう。
「…ルーミアか。ま、今は夜中だし、アンタの領域よね。
でも分かってると思うけど私たちは食べ」
「喰ってみろ。」
武蔵が霊夢を遮り、そう言った。
気がした……
「は？アンタ今なんて…」
「俺も剣の道は長い。相手を殺さず…斬り伏せる手段は
心得ておる。にしても童児とは思わなんだぞ。噂以上に
面白いな幻想郷は。」

「えー？食べてもいーの？」

「そうだ旨いぞ俺は。頭からがぶっと一齧りだ。
しかし、喰えるものならな……」
炎暑振るう今夏……
寝苦しい熱帯夜である…しかし
今だけは…この〝男〟の近くだけは…
身震い許さぬ凍てつく冷気に包まれていた。

ルーミアは相も変わらず気の抜けた声で
目の前の〝取って食べれる人類〟に

「そーなのかー。」

誰かが血が凍る音を聞いたと云う…

第六話『闇に包まれた男』

「宮本武蔵？いやァ…知らんなァ…」

ルーミアは『闇を操る程度の能力』を持つ。
その場に闇を作り出すことが出来るのだ。
彼女が展開した闇の中では全ての光源は意味を為さない。
月光も、松明も、或いは希望も……その全てが、
彼女の闇に包まれる。絶望の如く底無しの闇。

武蔵と対峙、「そーなのかー。」と発する
とほぼ同時にルーミアは地に着き闇を展開させた。
辺り一面を一瞬で包み込む闇…先程までは微々ながらも木々の隙間から覗かせていた月の光も閉じ、辺りは完全な漆黒の世界と化した。

闇
視界…
奪われた
成程…
妖術か

これは武蔵が其の一瞬で感じ取った思考の一部に過ぎず、
それを脳内で整理するまでの経過…凡そ0．…秒？
…とほぼ同時に武蔵が動いたッッ……

ルーミアは闇の中で〝視ていた〟。
否…無論、見えてはいない。
闇を展開すれば本人ですら視力を奪われるのだ。
それでも、事実…彼女に過ぎるもの……
知覚…察知…感知…推知……それら熟語を並べても
言い表せない程の〝視えた〟感を彼女は感じたのだ。

思考を可能な限り超凝縮させた集中力の最中、
闇を知る者故の本能的な結論に至る。
「この人間もまた…闇」
そして時は動き出す……

カ　ッ

闇が明け…映るものは
閃光の如く弧を描く刃文の残像。
両者が対峙し、闇を展開…そして音と共に現れる光
時間にすると一秒ほど？
もしかしたらそれ未満…？

……を感じた霊夢は即座に理解する。
「斬った。」と。

武蔵の手には事実刀剣が握られていた。

彼の時代より武蔵の愛刀とされる
『無銘金重』の冷たく黒い照りが舞った。
「安心しろ斬れてはおらん。」
武蔵は刀を鞘に納めつつ放つ。
〝斬れていない〟……と。

地面に倒れ伏せたルーミアはパチりと目を開け、
ムクり…とゆっくり上体を起こす。
「あれー？真っ二つになってないよー。」

「ふふ、少しだけ当ててはいるがな。しかし薄皮を裂いただけに過ぎん。ススキの葉で指を切ったようなものだ。
……と、そういう訳だ。博麗うじ、お判りか？」
武蔵が霊夢へ顔を向ける。
その顔は何時になく真剣である。
俺は殺していない…だからお前に退治される筋合は無い
――――とでも云うような顔つきだ。

「……そういうのは、此処じゃ通らないわ。」
とだけ巫女は呟く。

「絶対真っ二つになったと思ったんだけど、
斬れてないならまーいいかー。」
「袈裟懸けに一文字だ。本来なら死んでいた。
…が、博麗うじが五月蝿いのでな。」
武蔵はニヤニヤと霊夢を見る。
心底不快そうな目を霊夢は返すが、武蔵はそれすらも
愉しんでいるような気がして、プイッとそっぽを向いた。
「それにしても、速かったなー。ほんとに人間？」
「お主が〝何か〟をしようと企てていた事は直前に察した。
結果、〝何か〟の正体は光の呑む底無しの闇…であったが、
事前に感知していれば何があっても対応し得る。
……あとはお主が動くより速く斬るだけだ。」
「もうちょっと早く動けばよかったのかー。」

「ぶっ…くくく…仮に俺が油断してお主の行動を讀めずにいたとしても、何ら変わり無い。近付いては斬る。
…闇で視力を奪われたからと云ってまんまと命を晒して
しまっては兵法者とは呼べん。」
「そーなのかー。じゃ帰るねー。」
ルーミアは何処かへ飛び去って行く。
森元来の闇の中へ……

霊夢は思慮していた。
なぜこの男の全てに……
なぜこの男が闇〃で包まれているのかを……
そんな霊夢とは裏腹に、

「いやァ～～…腹減ったァ」

とだけ――――武蔵は言った。

第七話『性分』

「武蔵を知らない…？良い機会じゃないか。
　さて、此処でも斬り登るとするか……」

「ふむ、旨かった。」
　武蔵は箸を置き、一息吐く。
　博麗の巫女は普段は自炊をしており、
　料理にはそこそこ…腕に覚えがあるようだ。
「はいはいどうも、質素なご飯で悪かったわねー。」
　恐くは何の感情も込められていない
　只の反射的な返事を返す。
「否、馳走だ。ありがとう。」
　感謝の言葉に霊夢は満更でもなさそうだ。

ふーんというような表情を浮かべた。
「…そう。じゃあ自分の食器は自分で片してね。
私はもう遅いから寝るわ。」
霊夢は自分の使用した食器を片しつつ
寝る準備に取り掛かろうとする。

「しょっき……」
「あ、そういえばアンタの寝床だけど。」
「睡眠など何処でも摂れる」
「あぁそう、じゃあ表出ていってくんない？」
「ふふ、其れが出来んのはそちら側だ。
俺を放っておけない癖によく言うわ。
案ぜずとも勝手に抜け出したりせぬ。」

＊＊＊

霊夢は布団を持ち、武蔵を本堂へ案内した。

「ここで寝ろ…と申すのか。」
博麗神社本堂――――寝るだけなら充分な広さである。
斯く言う巫女も幾度か此の場で寝た経験があった。
霊夢は畳まれた布団をそのまま床に置くと、
「何で私がアンタの布団運んでんのよ。」
と文句を言う。
「異な事を申す。博麗うじが自らやったのではないか。」
「如何にも〝持ってほしそう〟な顔してたからでしょ。
布団出してもちっとも運ぼうともしないで。」
「ハハ…博麗神社の決りは知らんでな。」
「ムカつく。」

…そして霊夢は武蔵に何かを傳えると本堂を後にした。
一人になった武蔵は床に布団を敷くと
閉められた障子へと目を向ける。
いつ貼り替えたのかも分からぬ和紙から

外の月光が透け…床に伸びる枠の影がまた乙である。
武蔵は障子に近づき霊夢から傳えられた事を思い出す。
「結界……とな。」
霊夢は〝念の為〟に武蔵の居る本堂に結界を張った。
外からは入れるが中からは出られない…というもの。
勿論、武蔵もそれを了承した上で、だ。
武蔵は障子へと手を伸ばし戸を開けようとする。
バ　チ　ッ
静電気のような音が鳴り武蔵は反射的に手を戻す。
ふむ、どうやら本当に出さないつもりらしい。
霊夢の〝本気感〟を武蔵はその結界から感じ取った。
しかしなぁ…博麗うじ、もしお前がそのまま
死んでしまったらどうやって此処を出ればいいのだ？
了承したとはいえ、万が一も考えられる……
内から出られず飢えて死に至る。ん～～……
それは不細工だ。俺に相応しくないわ。
武蔵は腰に手を伸ばしゆっくりと柄を握る。

依然武蔵からは脱力のみが見受けられる。
「勝手に脱出けやせぬ。」
自らが発した前言を撤回する訳ではないが…
巫女が結界を張った後に言った軽口がふと過る
「出れるもんなら出てもいいわよ。」
無論、軽口だ。しかし、
そう云える程の〝力〟が込められているのだろう。
宮本武蔵を閉じ込めて置ける程の結界なのだろう。
ふふ…と武蔵は鬼の如く形相で毒笑する。
「斬りたくもなるわ。」
武蔵は次の瞬間、目にも止まらぬ剛速で腰を切る。
一瞬彼の身体が消えたかと錯覚する水準の速度。
バキっと床板を踏み抜く程の〝踏込み〟……
……が音を立てる頃にはもう――――――

結界は斬られていた。

…〝出れるもんなら出てもいいわよ〟

ふふ、其うだったな博麗うじ……
約束は護るぞ。
世話ばかり掛けれんでな。
何処へ向かうにも同行して貰う訳には行かぬ。
是もまた勉強だ。

武蔵は刀身を鞘へ納めると
本堂から境内へと歩を進める。
彼は頻りに空を見上げ、笑った。

「それにしてもい〜い月だ。」

第八話『讀賣屋』

「さぁ斬ろう、立ち止まることなく――――」

草木も眠る丑三つ時……霊夢はふと目を覚ます。
と同時に直感した違和感の正体を即、理解した。
「アイツが居ない。」
――――博麗の巫女特有の能力か…将又、彼女故の勘か…
離れた本堂に　〝居る〟　筈の武蔵が　〝居ない〟　ことを
彼女は有り有りと感じ取っていた。
そうと分かれば直ぐさま装束へ着替え準備をし
〝一応〟、本堂へと足を運んだ。
「あーやっぱり結界解けてるわ。
もうちょっと強いのにしとけば良かったな。」

らっ…と障子を開けると案の定そこに武蔵の姿は無い。
霊夢は大きな欠伸をするとキッと表情を変え、
その場から瞬く間に舞空した。

一方その頃――――

「見渡す限りの木々、歩けど歩けど抜け出す気配も無い。
ふふ…賽銭を望むには人から離れすぎておるわ。」
〝人〟か〝妖〟かは問わない
武蔵は取り敢えず〝何者〟かに遭う為に
森を抜け出そうとしていた。
道中、幾度か〝妖気〟を感じつつも
武蔵がそれ以上の反応しなかったのは、
その気を放つ何者が、武蔵の悪魔的な〝気〟に
対して畏怖している事を理解したからであろう。
「ハハ…震えておるか。」
或る意味で運が良いのか悪いのか。

道中で武蔵が感じられた妖気は何れも
武蔵に戦く雑魚妖怪のものでしか無かった。
土地勘も無く、無作為に一刻ほど歩き続けると
遂に武蔵は森から抜けることと成った。
抜けた先、月光に照らされるその場所を眺め
武蔵は思わず声を漏らす。

「なんと、なんとなんと♡」

武蔵が辿り着いた場所は〝運良く〟…？
人里であった。現世に蘇った時と比較すれば、
幻想郷の人里は武蔵の生まれた時代により近く
懐かしささえ感じられた。
武蔵は早速、里へ降りようとする。
……が、
風を切る音が次第に近づいてくる。
武蔵はそれに呆気を取られ、足を止める。

「何だ？」と。
びゅぶぶぶぶぶぶッッッ

「ん～…？おッ、お～。」
風を切る轟音が止まり、音の〝正体〟は武蔵の前に。

少し斜め上の宙から武蔵を見つめる冷徹な視線は
博麗の巫女、博麗霊夢による〝全てを破壊する目〟
「博麗うじ、主ゃ本当に人間か!?
話には聞いていたが…こう目の当たりにすると…」
「そんなことはどうでもいいのよ。
帰るの？帰らないの？」
「ふふ、帰らせたくば力ずくで強行すれば良い。」
「あぁそう…」

――――――次瞬、霊夢が針を飛ばすまで
凡そ1秒を切り、至近距離の武蔵に届くまで

凡そ0．００……？

「っとォ…」

……武蔵は何の事もなく針を右手で掴むとそれを地面へ投げ捨て困った顔で霊夢に言う。

「危ないのォ…」

通常であれば目にも止まらぬ速度で放たれ、刺さった後で何をされたか気付く水準の攻撃であった。

……が相手は宮本武蔵。霊夢が針よりも速く放っていたのは本人ですら気付き得ない

『針を飛ばす』

という脳の信号であった。武蔵の生きた彼の地、その信号をより早く察知することが生死を別ける。

そんな地の天下無双、宮本武蔵――――

察知した後であれば相手がどんなに速く仕掛けようと武蔵なら何とかしちまうだろう。

霊夢は表情一つ変えなかったが次の行動へ移すまで数秒かかった事を見るに少なからず驚嘆していた。

…が、博麗霊夢…針が通用しないことを理解すると
直ぐに他の手段へ移行、そして実行……
に至る直前、武蔵が掌を突き出し
霊夢を制止する。
「待たれい。出れるものなら出ても良い…と
そう申したのは博麗うじでは無かったのか？
それを本当に出られたからと言って攻撃とは物騒な。」
「あー？あんなん冗談に決まってるでしょ。
まさか結界斬るなんて普通思わないし。」
「くく…容易く斬れたが自信があったのか？
アレで……武蔵を閉じ込められると。」
「帰るわよ。もう2時間以上もアンタを探してて
クタクタなの。迷惑かけないでよね。」
「それは申しわけないが…もう陽も登っとる。
どうだ、少しだけ里を案内してくれないか？
眠りたいというなら俺一人で良いがな。」

霊夢は困った顔をしつつも、やれやれ…と
了承した。彼女がここまで言われるままなのも
珍しいが、放っておけない〝空気〟で武蔵が澱んで
いることもまた事実であり、当然と言えば当然であった。

「はぁ～…３０分くらいで満足してよね。」
「さんじゅっぷん…」
「あとそれ、刀隠しときなさい。早朝だからそんなに人はいないと思うけど、二本差し構えた大男が闊歩してるとこを見ちゃったら吃驚するし。」

さっき迄の霊夢の鬼迫は消え失せ、巫女が人間としての仕事を全うするような、其んな優しさ…のようなものが僅かに感じられた。

――――そんな中、霊夢と武蔵の一部始終を
ずっと見ていた者が一人……

「あやややや……見出しは

『博麗の巫女、謎の大男と一触即発！』

で決まりかな。」

第九話『例の男』

「四百年前の侍…？幻想郷じゃ
まだまだヒヨっ子だなァ……」

「里にも物の怪が住んでいるのか？」
「そうね、まぁ、物の怪…っちゃあ物の怪か。
でも人を取って食うようなヤツらじゃあ……ない、し
そんなことしたら私に退治されるからね。」
「人と妖が共存してるとは滑稽な話だ。」
故に幻想郷――――…
人も妖も神も悪魔も獣も
全てを受け入れる幻想の世界である。
故に武蔵も又、受け入れられた存在なのだ――…

「時に霊夢よ――――――」

武蔵が霊夢に呼びかける。

「あー？何よ。」

霊夢はこれまた面倒臭そうに立ち止まった。

「ぬしゃ歩くのが速いわ。

もそっとゆっくり歩かんか。」

何度でも言おう。博麗の巫女が引き連れて

人里を共に闊歩しているのは、

腰に大小二本差しを引っ提げた

総髪の大男なのである。

言わずもがな……目立つのは必然であった。

騒ぎを起こしたくない霊夢が無意識に

早歩きになるのも無理はなかった。

人里とはいえ、この男に注目するのが

必ずしも人間だけとは限らないのだ……

いや…もしかすると人間以上に――――――

「れ、霊夢さん…？」

今にも折れそうな、か細い声が

背後から聞こえてきた。

「あら！小鈴ちゃん。」

霊夢に話しかけて来たのは

人里の貸本屋『鈴奈庵』の看板娘・本居小鈴であった。

彼女も人間ではあるが、確実に〝こっち〟側である。

「霊夢さん、そちらの男性って例の…」

「あ！あぁ～……こいつは！その…！」

急に小鈴に話しかけられた霊夢は

武蔵の存在を忘れてしまっていた。

「あの～…なんというか……ん……？〝例の〟？」

例の？え？例の……？例のってナニ？

コイツとはほら…まだ昨日出会ったばかりで

っていうかコイツは昨日幻想郷に来たばかりって

言ってたし…私としかまだ会ってないはずなのに

〝例の〟……？って……。あ。そういえばルーミアは
会ってたけど…いや、アイツは関係ないか…
そんな知能は無いだろう。神社で一緒にいるところを
誰かに見られた…？でも人里に住んでる小鈴にまで
伝聞されてるってことは…
霊夢は一瞬の間にありとあらゆる
可能性を考え……否……感じて
脳で整理しようとしていた。
……！
「小鈴ちゃん、〝例の〟って何のこと？
コイツのこと知ってるの？」
ほんの少しだけ怖い顔でズイっと迫ってくる
霊夢に小鈴はアタフタと手を振りながら答える。
「あぁいや！知ってるというか、
けけけ今朝！今朝早くにあやさんに
人里版の新聞を鈴奈庵に置くようにお願いされて、
その時に妖怪版の新しい号外も

今朝完成したから特別に見せても良いって
言われて、見せてもらったんです。
そこで、その、霊夢さんと……その、
男性の記事が見出しになってて…
って感じで……」

やりやがった。
……
……
……
込み上げてくる様々な思考…
幾許かの感情を抑えつつ
霊夢は小鈴に問う。
「まさか人里版にも？」
「いやいやいやっ！人里版には
もちろんそんな事は…！ととと、

というか霊夢さんが検閲してるんですよね？
人里版は確か…」
「あいつなら直前に記事をすり替えかねない。」

「なぁ娘。その新聞とやらは何のことだ？」
武蔵が小鈴に問う。
小鈴からして見れば新聞で見た〝例の〟
でしかない、謎の大男である。
しかもよく見たらかなり怖い。
「あ、ああ！ごめんなさい！勝手に
置いてけぼりにしちゃって！
って…え？し、新聞…読んだことないんですか？」
「何のことか聞いておる。」
「し、新聞っていうのはその…事件とか事故とか…
起きた大きな出来事を色んな人に広く素早く傳える
もので…紙でできてるんですけど…」
「瓦版のようなものか。

そこに俺が載っていたということか？」
瓦版……武蔵の生きた時代ではまだ普及こそ
していなかったものの、そのものは存在しており
武蔵もそれを認知していた。
そして、それがどういうもので、そこに
載るということがどういうことかも――――
「はいっ！…はい…載ってました。」
「さっき〝妖怪版〟と言っておったな。
読むのか？妖も、その　しんぶん　を。」
「よ、読みます。妖怪版ですし…」
ふふ…と武蔵がいつものように笑う。
しかし、いつもより少しばかり嬉しそうだ。
「聞いたか…博麗うじ。
俺の名が讀賣されているらしい。
幻想郷（この地）でだ……
俺が噂されている…」

「そういうのが好きだ。」

急速に加速する――――――

第十話『和食派』

「斬りたい…そう思った時には――――
もう斬ってるんだってさ」

ぴしゃんっ

――――厄介なことになった。
あの鴉天狗が号外を出してしまったからには
もう遅いだろう。きっと色んなヤツが此奴に会いに来る。
……人里で騒ぎに至らなかったのが幸いか。
まぁ、それもどうだろうか……何れそうなるのも
時間の問題かもしれない……
何しろ此奴は妖怪じゃない。
此奴は人間だから妖怪のルールを守る気なんて無い。

霊夢は本居小鈴から例の話を聞くもそそくさと
神社に帰り、武蔵を本堂に押し入れて結界で閉じ込めた。
とりあえずの応急処置紛いみたいなものだ。
特に何の意味もないことは自覚していた。
今は独りになりたかったのだ。
……うん。そうね。と、とりあえず
境内の掃除でも……その後あの天狗を探せばいいわ。
でも居てほしい時———肝心な時に居ないのよね…
霊夢が心ここに在らずで箒を掃いてから
4～5分……日傘に隠れた小さな躰の少女が声を掛ける。
「誰もいない神社でせっせと掃除？博麗の巫女。」
小さな躰の正体は強大なる力の吸血鬼
〝レミリア・スカーレット〟であった。
直ぐ後ろには日傘を持ち、主を日光から守る
人間の従者、〝十六夜咲夜〟の姿もあった。
…まぁいつものセットである。
「げ。…そうよ見てわかるなら帰ってくんない？

宴会の予定はないのだけれど。」
霊夢はあからさまに嫌そうな顔を浮かべた。
「アッハハハ！相変わらず愛想がないなぁ。」
レミリアは満面の笑みで高笑いすると、
ピタリとそれを止め、ニヤリと口角を上げる。
「噂に聞いたよ霊夢。
面白い人間を飼っているそうじゃない。」

……

……

……

「いない！そんな人間は。」

吸血鬼とメイドはポカンとした表情で
視線を合わせると同時に爆笑（大笑）いした。
「ぷっ…くく…巫女は嘘が下手なんですね…」
従者が片手で口を押え、そう云う。

「ぷっ……ぷぷ…屋根屋根…」
吸血鬼が両手で口を押え、そう云った。
屋根……？霊夢は振り向くと
ジトーっと屋根の方向を睨め付けた。
「何でそんなとこ居んのよ…」
「此処から幻想郷を見ておった。
なかなかどうして、良い景色だ。
……結界なら斬っておいたが、何か
不味かったか…？」
そう言い終えると、武蔵は
手を翳しつつ頻りに遠くを見渡す。
…と思えば直ぐにまた下を見た。
目線の先は勿論、紅い悪魔へ――――
「凄いな。一見すれば童女にしか見えんが
……得も云えぬ不吉な気を纏っておる。
ふふ、一体何人殺してきたのだ？妖のお人よ。」

〝紅い悪魔〟レミリア・スカーレットの禍禍しさを
一瞥で読み取れたのは果たしてどちらの力量故か…

「お嬢様へ質問をする前に……」
隣の咲夜が云うと、武蔵はギョロ…と目線をズラす。
「人間風情がお嬢様の御前で高みから話すなど
言語道断ですわ。今すぐお降り下さい。」
レミリアはそれを聞くと嬉しそうな顔で云った。
「あら、たまには良いこと云うじゃない咲夜。
でもどこかで聞いた事あるセリフね。それ。」
「門番から漫画をお借りしましたわ。」
多分それ私の漫画なんだけどなー…とは敢えて言わず、心に留めて置く事にした紅魔館の主であった。
「…まぁでもいいわ。私から訪ねてきたんですもの。
それに、只の人間ならまだしも…」
咲夜を宥めると話を続けた。
「何人殺したか答えましょうか?答えは

〝覚えてない〟よ。人間は私の様な高貴な吸血鬼にとってただの餌でしかないの。貴方は今迄に食べてきたパンの枚数を覚えているかしら？」
「ぱん……」
「何よ、どいつもこいつも和食派ってわけ？」
武蔵はフフ…と笑みを零すと
神社の屋根から飛び降りる。
ちゅどっ
武蔵はレミリアの目の前に着地する。
自分より大幅に上背のある男が
ガラスのような目で見下ろして来てなお、
彼女は飄々と話し掛けた。
「あらあら、随分と派手な降り方じゃない。
足大丈夫？人間は脆いからねえ。」
「どうでもいい。あんたが何人殺してようと、
〝ぱん〟が何であろうと、俺には関係ない。」
「？…自分から聞いてこなかった？」

「お主も気付いておるのだろう？
俺も人を幾多の人間を殺してきた。
だからこそ分かることもある…」
二人の間合いが陽炎のようにめらめらと揺れた。
チリ…チリ…と音さえも聴こえた…気がした。
――――先に口を開いたのはレミリアであった。
「何だか温いねえ…所詮は人間か――――
イメージとしては、御託なんて並べずに立ち合えば
即斬る！くらいかと思ってたけど拍子抜けだわ。」
露骨に煽られながらも武蔵はクスッと笑った。
「……本当に面白いな〝ここ〟は…俺がここまで
言われ放題なのも新鮮だ。存外悪くもない――――
が…それはお主も同じことだ。何故かかって来ない？
妖ともあろう者が人間にここまで間合いを近付かれて
尚、棒立ちとは笑止な。怯えているのか？俺に。」
クスクスクスクス…と武蔵は嘲笑する。

「あらあら私も言われ放題ってやつね。ふふっ。
咲夜、日傘を閉じなさい。瞬殺するから。」
レミリアは咲夜にそう命令すると
肩をぐるぐる回し、やる気満々といったところだ。
その表情も笑みを含んだ余裕の〝それ〟であった。
「…お嬢様、どう足掻いても彼は人間です。
お嬢様ほどの強力な存在が一撫ですれば
瞬時に肉塊と化してしまいますわ。」
十六夜咲夜は命令通りに日傘を閉じる…
ことなく、そうレミリアに告げた。
「何が言いたい？咲夜。」
「人間の私が御相手するのが良いかと。
私にやられるようならお嬢様の相手など以ての外。
私がやられるのであれば、ある程度の実力者と認め、
お嬢様の楽しみも増えるでしょう。」
「…なるほど良いこと言うじゃない。
確かにねえ、咲夜の戦うメイド長っぷりも

見てみたいし、やってもらおうか。」
レミリアはそういうとニコニコと笑いながら
咲夜から日傘を受け取ると、
後退りしながら神社の縁側に腰を掛けた。
日傘を持つ両手はソワソワとし、今から始まる
戦いを楽しみにしているのが誰の目からも伝わった。

「じゃあ始めましょうか。お侍さん？」

第十一話『一泡』

千日の稽古を鍛となし万日の稽古を錬となす？
甘いね…億日はやらないと――――――

「さぁ始めましょうかお侍さん。」

いざ試合開始という時、侍は考えていた。

なぜこの娘は構えぬ……？
この刹那――――もし俺が
瞬時に斬りかかっても余裕を持ち対応できると……
そう申すのか……？
立ち会って尚、俺の力量を図れぬほど盆暗ではあるまい。

そうか…この娘も持っておるのだ。
不思議な術、奇っ怪な妖術を使える者なのだ。
この間合いから俺に仕掛けられても
平気な何かを――――――

「其方から仕掛けないのであれば
勝負が始まりませんよ?」

十六夜咲夜は呆れたような表情で武蔵に告げた。

「ん…」
武蔵の胸に去来した想い……
歓喜以外の何物でもないだろう。
侍は楽しんでいた。
何をされるか全く以て見当のつかない闘いを。

「では…参る」

発した刹那――――
武蔵が腰を切り抜刀……
次瞬――――
全身を脱力……それはまるで液体のように…
重力に身を任せ体勢が崩れ落ち、
その体重を踵に乗せ、ぬるり…と
踏み込んだ……!!!
この間は一瞬とも云える程であった。
常人の動体視力ではここまでを捉える事は
まず不可能と言って良いだろう。
武蔵が咲夜に間合いを詰めた……が
「ぬぅ…!?」
気付いた時に目の前にいたはずの娘が
いないのだから天下無双・宮本武蔵も
思わず驚きの声を隠せなかった。
チク……

武蔵の腰に鋭利な刃物が突き付けられる。
いつの間にか背後を娘に奪られていたのだ。
表情には出さずとも武蔵は驚愕した。
侍が背後をとられるなど、有り得ないのだから…
「まだ終わらせる訳にはいきません。
お嬢様に楽しんで貰わないといけませんから。」
十六夜咲夜は首を傾けてニコッと笑った。
「もうー！咲夜！一気に片付けちゃダメだからね！」
縁側に座るレミリア・スカーレットが冷や汗を
かきながらムスッとした顔で従者に注意した。
「分かってますよ！お嬢様、心配無用ですわ。」

……
……

「分からん…何をしたのだ？真正面に捉えた筈の姿。
一瞬で背後へと回られた。速度という問題では無い。

線の移動ではなく…まるで点…俺の後ろに辿り着くまでの通過、過程がまるで感じられなかった。」

「クス…意外と臆病ですね。
敵に答えを求めるなんて。
貴方、今殺されてましたよ？
分かってます……？」

そう……武蔵は殺されていた。
仮に十六夜咲夜が殺そうと思えば
殺されていたのである。

「ふふ…そうだな、俺は殺されていた。
ただお前は……その止めを怠った。
それもまた事実だ。違うか？」

減らず口を……

咲夜は憐れむようにそう思った。
でもそうね…このまま終わらせることも
可能ではあるけどお嬢様を楽しませるには
まだ決着には早いのよね……
拮抗してる様に見せてから、最後に
態と負けてお嬢様に回してあげるのも
一つの手だけど…お嬢様じゃ役不足ね今のところ。
うん。ギリギリまで粘って最後に勝ってしまおう。
「そうですね。私は止めを怠りました。
いやー我ながら甘いですわ。でもご安心…
次は殺して差しあげますので。」
嫌になるほど性悪な満面の笑み。
その余裕は彼女の強さたる所以かも知れない。
そして勿論、『次は殺す』という発言も
ブラフ……虚勢である。
「さて…」
咲夜が左腕を真横に伸ばす

……と同時に十六夜咲夜が能力を発動する――――

〝時間を操る程度の能力〟

それが彼女の妖術……否、能力である。

そして――――時間が止まる。

十六夜咲夜だけの時間が始まるのだ。

「…どうしたものか…とりあえずは…」

咲夜はぶつくさと言い、武蔵の周りに〝少量〟のナイフを設置する。

「さすがに四方位から狙うのはまだ早いわね。

まずは二方位…これが凌げなければ話にならない。」

武蔵の技量を図る為……

というよりはレミリアの機嫌を損ねない為には短時間で勝ちに行くのが悪手だと心得ているのだ。

咲夜は武蔵の正面と左方向にナイフを置いた。

パチンッ

そして――――時間が動き出す。

数本のナイフが武蔵を目掛けて
猛スピードで襲いかかる…！

キィィィ…ン

……武蔵、此れを呆気なく両断――――
驚くべきはその動体視力、判断力、技術力である。
武蔵からしてみれば、十六夜咲夜が左腕を伸ばした
〝瞬間〟に、無であった宙空に小刀…？のようなものが
出現し自分を目掛けて飛んで来たのだ。
しかも一本だけではなく、数本――――
前からだけでなく横からもだ――――
それらを瞬時に脳内で整理…把握し、
刃先が自分の身に迫るコンマ０…　の世界で
武蔵は〝一太刀〟で全てのナイフを斬り捨てた。
チャリチャリ！っと切断されたナイフが地に落ちる。

「弱い鐵じゃの～……」

これを受け十六夜咲夜、
少し態とらしく目を見開いて
ニマッと笑った。
まるで「偉い偉い」と童子をあやす
母親のような表情で……

「どれ……もう一度やってみろ。」

「もう一度……？ええ、言われなくてもやりますが。」

「先刻な…左腕を伸ばし切る直前……
お前の意識が俺を叩いた……」

「？何か頭に重病を抱えているのかしら……」

武蔵は深く腰を落とし、母趾球に体重を乗せる。
ギラッと照る犬歯…ミリッと浮き上がる総髪…
その形相はまるで鬼……否、まるで足りない。
その形容詞は…武蔵の前ではまるで空しく…
鬼以上の〝宮本武蔵〟そのものの表情であった。

「妖術使いと言えど、やはり年端もゆかぬ女子だ。
先刻から嫌なほど伝わって来るわ。」

「いや、ホントに何言ってるか理解(わか)らないんですが……」

「刻を止められようと……
先に読んでしまえば造作もないという事だ。」

第十二話『擬態』

地上も月も地獄も…根刮ぎ俺の物とする……

武蔵は内心打ち震えていた――――――
博麗霊夢の宙を自在に舞う術に続き……
この娘の刻を自在に操る術……
いや…まだ武蔵にとっては確かではないが、
武蔵はそう仮定…と云うよりも
直感…武蔵の研ぎ澄まされた第六感が
そう感じ取り、それに武蔵は歓喜していた。
なんという力！どれも俺の今まで生きてきた
地では体験はおろか、見聞したことも…
想像したことすらも無い！

一体…その力でどれほどの富を…名声を…
手に入れたというのだ……？
お前の持ってる全てを…斬り伏せ…
俺の物としたい……!!

十六夜咲夜は余裕の表情を保つ。
然しその胸中に抱く想いは〝焦燥〟
そして〝期待〟であった。
この男なら全力でぶつかっても――――
「ほう。私の能力を見破ったのですね。
中々この短時間で出来ることではありませんよ。
……そうね。じゃあお言葉に甘えてもう一つ……
こういうのはどうかしら……！」

大気が震えた

武蔵の集中力は臨界に達する。

音が消え…風が止まり…震えも……
まるで時間が止まったかのように――――――
止まったかのように――――――

ではない……止められていたのだ。
十六夜咲夜の能力が発動していた。
十六夜咲夜の能力…それは、トリックを見破った
からといって決して容易に攻略できる代物ではない。
寧ろ、見破るも見破らないも同じ事と云えるだろう。
それほどまでに強力な能力なのだ。
「ごめんなさいね。武蔵さん。」
咲夜はそういうと武蔵の背後にそろりと回り
華麗に指を鳴らした。
無論、その音は彼女の耳にしか届かない。
そして時は動き出す――――――
先程とは比べるべくもない
武蔵を八方から囲う無数のナイフ。

最も武蔵から近い位置で１ｍ弱といったところか。
レミリアを楽しませる戦いを心掛けるはずの咲夜が
一気に蹴りを着けようとする、そんな風情である。
それは武蔵の〝普通でなさ〟に充てられたからに違いなかった。咲夜が武蔵と対峙してから一分と経っていない。彼女が仕掛けた攻撃は防がれたとはいえ、ただの一度きりだ。それでも遊びを捨てたのは…十六夜咲夜が強者だから――――武蔵の実力をあの一度で見抜いたからだ。

夥しい刃物が武蔵を囲み、高速度で襲いかかる。
彼は何を思うのか――――はたまた……

「先を読んでしまえば造作もない」

一度目の攻撃を防いだ彼の台詞である。
とはいえ、彼はもうナイフに囲まれている。
読んでいようがなかろうが、もう遅い…
というのが普通であろう。

然しながらこの男〝普通〟ではなかった。

だろうな――――――

武蔵の第一思考はそれであった。
やはり〝読んでいた〟。こうなる事を。
相手の思考、次なる行動を、
先に感知してしまえば……
簡単に言うが、それは容易ではない。
彼の時代を生き抜いた、
武士(ものの)ふならではの技術である。
その超Ａ級がこの男〝剣豪　宮本武蔵〟

……そして、あの娘は俺の背後(うしろ)に

武蔵の第二思考――――――
無論、ナイフはまだ届いていない。

娘の前に…これだ。
この小刀を切り抜けねばならん。
う～…ん……

ナイフは武蔵の肉を穿かんとする。
その銀色の照りが一本の線のように閃く。
武蔵を囲む〝一本の線〟の群れ――――
切り抜ける……？いや……

キン…

という金属音と共にザクッという
生の肉に刃物が突き刺さる嫌な音が幾重にも重なり、
一つの音となって鈍く耳に残った。
刺さった。
それも、一本や二本ではない。

咲夜がそれを理解する、と、ほぼ同時であった。
あの硝子玉のような大きく丸い生気のない瞳が
至近距離に――――――

ザンッッッッ

斬ら……
れ……
……
……

「咲夜ぁーーっ!!!!」
その声はレミリアのものであった。
止まっていたのは武蔵だけでは無い。
咲夜以外の者は〝全て〟止まっていた。
故にレミリアから見たその光景は

『咲夜と〝侍〟が瞬間移動し、咲夜が斬られた…
かも……』
というものである。

主人の声にハッとした咲夜は
自らの無傷を受け容れられないでいた。
斬ら…斬られ……てない。
…
少女?????は困惑していた。

「どうだ?俺は強いだろう。」

武蔵が優しい口調で問い掛ける。
咲夜は激しく鼓動する己の心臓の音を
無視するのに精一杯であったが、
呼吸を整え、落ち着かせた。

「…どうして私が後ろにいると?」

「言ったはずだ。お前の報せを直前で受け取った。
力はあれどやはり幼子…隠すのが下手だな。」

武蔵の指摘は的を得ている。
咲夜はその言葉を素直に受け取るしか無かった。

「例え刻を…思考を止められようが
刃が当たるまでに距離があるのなら防げる。
不可思議…なぜ止めてる間に刺さんのか…?」

「防げる…って全然防げてないじゃない!
血っ…あ〜…地面が汚れちゃって……!」

防げると言いながらも武蔵には幾本もの
ナイフが突き刺さったままだ。

そこから流れる血は土にドス黒いシミを作る。
霊夢は武蔵に指摘した。

「ふふ、霊夢…防げておるわ。
俺の初太刀…まず頭を狙う刀を斬り落とした。
刺されればひとたまりもないのでな。
残りの刃は、出血の少ない場所に刺さるよう
動いた。事実俺は立っている。」

そうだ。武蔵は立っている。
確かに言われてみれば武蔵に刺さるナイフは
どれも首や胸、腕や太腿の大きな血管の通る
部位を避けて刺さっていた。あの瞬時に
刺さる位置を選択し、動いたというのは事実だ。
武蔵は至る所に突き刺さるナイフを
表情ひとつ変えずにズッ…と一本一本
引き抜くと地面へとそれを落とす。

不思議なことに出血は想像を遥かに下回っている。

「さて…」

武蔵の呟いた一言に肩を僅かに跳ねさせる。
咲夜は迫り来る緊張感を解けずに居た。
しかし、それでも余裕の面持ちを崩さないのだから彼女の精神力が尋常では無いということだろう。肝が据わっている。

「続きだ。喋り過ぎた…」

先程のエア斬撃……
喰らった経験を持つ霊夢には
あれの〝威力〟がよく理解(わか)る。
無論、肉体的なダメージは一切ない。
しかしあれを一度喰らってしまっては
暫くは戦意など喪ってしまうだろう。

……と言ったような思考が巡る。

「ええ。勿論ですとも。」

十六夜咲夜はニコッと微笑み首を横に傾ける。
霊夢は少し驚いたような顔をすると
やるじゃん。と感心するような表情になった。
その咲夜の返事に感心したのは
霊夢だけでなく、武蔵もである。

幼子……？ふふ…良～～い胆だ。
幾千もの死地を潜り抜けた
兵(つわもの)の貌をしておるわ…

武蔵は咲夜に心中『天晴れ』
と賛辞しながら腰を低く構える。
咲夜は息を飲んだ。今にも斬られる……

という数瞬先の現実を回避する術を
考える余裕が無かった。その数瞬先は
今にも訪れようとしているのだ。
今……今……今今今今今今今今今……
その今は今この瞬間、今にも起ころうとしていた。
その時――――――

ぱんっ！
「はーい。そこまでー。」
両の手を叩く音に反応した二人が振り向いた先で、
終わりを告げたのはレミリア・スカーレットであった。
「咲夜〜。おサムライが強いのは充分理解った。
私がカッコよくトドメを刺すから退がってなさい。」
美味しい所は持っていきたがる、お嬢様のいつもの癖。それは自分の持つ実力を誰よりも理解しているからであろう。過信し過ぎず、それでいて傲慢――――――
十六夜咲夜の緊張はレミリアの声一つで
和らいだ。先程までの張った肩肘も落ち着くと、

少し困った優しげな表情で
「御意。」
と一言呟き、武蔵の方を向く。
「降参です。」
とニッコリ笑いかけた。
私は勝敗なんて拘らない…お嬢様の意のままに。
そういった心情が込められた、相手にとっては
やや挑発的とも捉えられる顔だ。
武蔵は表情を変えずとも頭髪はメラ…と跳ね上がり
「おい…」と一言。怒りを隠し切れない様子だ。

「おい…」
出しうる限りの低い声で
武蔵の真似したのはレミリアであった。
「…じゃないわよ。咲夜は負け。アンタは勝った。
その仇討ちを私がするんだから。」
武蔵はレミリアに注意を向けると

彼女は端正な顔で無邪気に笑んでいる。
ふんす！と言わんばかりの期待に溢れた
澄んだ瞳と、これでもかと上がりきった口角。

「……ふむ。腹も満たぬまま止められ
やや心残りはあるものの――――――
…確かにな。お前の方が〝強い〟
頭を斬れば下の者も自ずと退る。」
「それはねえ。私を斬れたらの話。」

武蔵とレミリアが向き合い、
武蔵が刀を構えると、
レミリアは悠々と距離を詰め
武蔵の構える刀身を左の手で握り締める。
ギュッ…
「あっ、お嬢様切れてしまいますよ！」
咲夜は咄嗟に口に出すが、その言葉にはどこか

本気で心配しているという念が感じられない。
「ん…ん〜〜〜〜…？」
武蔵は目を引ん剥いてぼそっと漏らした…
「刀が動かせん。」
対するレミリアは不敵に笑うと
右手を目一杯、弓のように引いた。

――――――瞬間……

武蔵の顔面に炸裂した直撃弾!!!

華奢な細腕からは凡そ想像し得うる筈もない程の
……〝超〟鉄拳――――――〝超〟剛力――――――
バオッ
上背六尺＊　はあろう大柄な肉体が

横一直線に吹き飛ばされた。
＊　約１８０ｃｍほど
それは弧を描くことなく勢いを保持したたまま
後方１０～１２メートル先の大木へと激突。
バシャアッ！と大きな音を立て木の根元に崩れる。
衝撃からぱらぱらと新葉が大量に舞い散った。
武蔵は意識は彼岸を彷徨う。
白目を剥き、半開きの口からは滝のように涎が垂れ、
ピクピクと痙攣したままそれ以上反応は見られない。

「え……」
霊夢の口から漏れる間の抜けた声。
〝呆気ない〟
それが彼女の素直な感想であった。
「決着？」
レミリア・スカーレットがフフンと笑うと
辺りは静けさに包まれた。